

れきし 散歩

じんしん らん 壬申の乱～鈴鹿関のはじまり～

ことのおこり

中大兄皇子(後の天智天皇)は、645年に乙巳の変によって、法治国家への改革(大化の改新)を進めていました。また、667年には都を大津京(滋賀県大津市)に移します。しかし、671年に天智天皇は重い病となり、その後継者を誰にするかが問題となりました。

天智天皇の崩御

天智天皇の後を継ぐ有力候補は、天智天皇の弟の大海人皇子と、天智天皇の子どもの大友皇子でした。天智天皇は、大友皇子を後継者にしたいと思い太政大臣に任命しましたが、それ以前に大海人皇子を皇太子に任命していました。天智天皇は大海人皇子の殺害をも考えますが、大海人皇子はこれを察して吉野(奈良県)に去りました。この後、天智天皇は崩御しました。

内乱のはじまり

翌672年、大友皇子は、吉野に兵を送り、大海人皇子を排除しようと企てます。一方、大海人皇子は、6月24日に妃の鸕野讃良(後の持統天皇)とわずかな部下とともに、自分の領地がある美濃国(岐阜県)に向かいます。

大海人皇子の逃走

大海人皇子一行は、横河(名張市)から翌25日朝に

積殖山口(伊賀市)に至ります。さらに、大山(加太越え)から鈴鹿(関町付近)に至り、国司の三宅連石床や美濃国の領地を管理している田中臣足麻呂などの出迎えを受けます。ここで兵力を得た大海人皇子は、鈴鹿山道(鈴鹿関)に兵士500人を配置して道を塞がせて先を急ぎます。夜には一行の元に鈴鹿関司から「山部王と石川王が来たので関に留め置いた」との知らせが入ります。また、先に美濃に向かって部下から、兵を集めて不破(不破関:岐阜県関ヶ原町)の道を塞いだとの知らせも届きます。吉野から脱出して3日の間に大海人皇子は戦う態勢を整えることに成功します。

戦いのおわり

大海人皇子は、伊勢・尾張・美濃をはじめとする東国から集まった大軍に、大津京に向かって進撃を命じました。大友皇子は大津京を逃れ、戦いは大海人皇子の勝利に終わりました。翌673年、大海人皇子は即位します(天武天皇)。この皇位をめぐる内乱は、壬申の年に起きたことから壬申の乱と呼ばれています。

壬申の乱と鈴鹿関

この壬申の乱の経緯が記された『日本書紀』には、「鈴鹿関司」との記述がみられ、これが鈴鹿関が史料に登場する最初となります。この記事によれば、672年までに鈴鹿関は置かれていたことにはなりますが、現在のところ、当時の関がどのような姿であったのかを知る遺構や遺物は見つかっていません。

また、鈴鹿関は、天皇の崩御や争乱など、都で異変があった時に、関の閉鎖(固関)が行われ、謀叛を企てる人物が東国に逃れて兵を集めることを防ぐ役割も持っていました。これは、壬申の乱の経験を活かして、天武天皇以降に整備が進められたと考えられています。

鈴鹿関跡の重要性

このように、古代最大の内乱である壬申の乱において、亀山市域、特に鈴鹿関は重要な地点であったことが分かります。そのため市では、鈴鹿関跡の国史跡指定を目指しています。また、これまでの文献資料と発掘調査の成果を、歴史博物館で10月10日から翌年3月6日までの期間に展示を行います。

